群馬大学教育学部紀要　人文・社会科学編　第56巻　29―49頁　2007

江戸時代の墓誌

群馬大学教育学部教授　石田　肇

一

墓誌というと、日本では一般には、墓に埋葬された人々の戒名・俗名・生没年・行年などを刻し、墓域に建てられた誌石をさすが、中国では被葬者の経歴などを刻した誌石が墓中に置かれるのが通例である。小稿では墓中に副葬されたいわば中国的なそれらを対象とする。中国でも墓誌の起源あるいは定義に関しては諸説あり(註一)、日本の場合も墓誌を厳密に定義するとなるとなかなか難しく、近世までの墓誌あるいは墓誌的なものをふまえたうえで考えるべきであり、それらの報告例が少ない現段階では厳密な定義は出来かねる状況といえよう。そこで小稿では墓中の墓誌または墓誌的なもの、あるいは墓誌的な文章が刻されたり、書かれたりしたものを網羅的に墓誌として扱うことにしたい。

日本の墓誌といえば古代のそれらが主な研究対象であり、中世や近世のものに関しては個別の例は言及されるものの、管見の限りでは全般的には論じられてはいないようである。墓誌の文章は儒学者の文集に散見されるが(註二)、墓誌そのものは発掘あるいは改葬の折などに見いだされたり、地表にたまたま現れたりして知られるにすぎないようで、積極的に調査するわけにはゆかない対象である。また近世のそれらには史料的な価値は少ない場合もあり、それゆえ近世の墓誌への関心が少ないのも当然のことなのである。因みに『国史大事典』(平成三年吉川弘文館)の墓誌の項目は古代のそれを詳述するにとどまり、近世のそれらへの言及はないようである。このような状況にあって、大脇潔「墓誌」(『日本歴史考古学を学ぶ』一九八六年　有斐閣)は各時代の墓誌をあげ、中世に関しては二四例を、近世に関しては十九例をあげて詳しいが、十九例の内の十二例は後述の東京都港区増上寺の徳川家に関わるものである。他の七例を列挙すると、以下のようなことに

なる。

これらについては筆者の不勉強故、典拠文献が未詳であり、小稿ではここにあげるにとどめることにする。[註三] また近刊の坂詰秀一編『仏教考古学事典』（二〇〇三年　雄山閣）にしても、近世のものにはわずかに言及するにすぎない。とはいえ、江戸遺跡研究会編『墓と埋葬と江戸時代』（二〇〇四年　吉川弘文館）の刊行に見られるように近世の墓や墓制に関心がもたれるようになった現在、墓誌への関心もたかまると推測されよう。尚、沖縄の墓誌に関しては性格が異なる故、小稿では取りあげないことにする。[註四]

1	鈴木長頼墓誌	宝永二年（一七〇五）	陶製骨臓器の銅蓋（表裏）	旗本・作事奉行	千葉県市川市亀井院墓地
2	新井白石墓誌	享保十年（一七二五）	石室蓋石（二枚）	旗本・儒学者	東京都円照寺墓地？
3	井坂町墓誌	文化四年（一八〇七）	石製方形	井坂広正妻	大阪市南区大念寺墓地
4	井坂広正墓誌	文政二年（一八一九）	石製方形	和泉屋当主	大阪市南区大念寺墓地
5	有馬徳純墓誌	天保八年（一八三七）	石室蓋石	越前丸岡藩六代藩主	東京都台東区寛永寺墓地
6	佐伯昌明墓誌	天保九年（一八三八）	砥石製長方形	旗本・蔵人所衆徒・画人（岸駒）	東京都本禅寺墓地？
7	有馬温純後室墓誌	嘉永五年（一八五二）	石室蓋石	越前丸岡藩七代藩主後室	東京都台東区寛永寺墓地

ところで後述のように、江戸時代の墓誌には「憐れみて云々」などというような定型的な文章を刻した蓋石を伴う例が知られるが、このような蓋石についての固定した名称はないようで、表現の仕方に困惑する。このような点からも墓誌への関心の薄さが知られるのである。

筆者は「明治時代の墓誌」（『澄懐堂美術館研究紀要　澄懐』第一号二〇〇〇年　以下、別稿）で、明治時代の墓誌について皇族関係、一般のものの両者をわずかな例ではあるが取りあげてみた。[註五] 筆者は考古学を研究する立場ではないが、小稿では別稿をふまえて江戸時代の墓誌を取りあげることにしたい。以下にあげる例は教示を受けたり、筆者が気付いた例にすぎず、時間をかけて諸文献にあたれば具体例はかなり増えるはずであるが、今そのような時間はなく、わずかな例ではあるが、このような課題があることを提起することも重要であるので、以下、散漫な記述をすることにしたい。

二

本節では筆者の知り得た江戸時代の墓誌をA徳川家関係、B水戸関係、C大名関係、D武家関係、E儒家・医家・文人関係、F文集所収のもの、Gその他、という順に紹介してゆく。筆者は以下にあげる墓誌を全て調査したわけではなく、文献やインターネットによる情報も多く、この点、不備のある点は否めない。以下はわずかな例をあげるにすぎないが、江戸時代の墓誌を考える上での基礎作業にはなるであろう。誌文を録文すべきではあるが、紙幅の関係もあって基本的には

省略する。関係文献を参照願いたい。形制についてはなるべく紹介することとし、法量は縦×横×厚さで単位はcmである。また写真を十三枚示すことにする。

A　徳川家関係

徳川家に関しては、増上寺徳川将軍墓出土墓誌、水戸徳川家に関わる墓誌、そして紀州徳川家、ついで御三卿のひとつ清水家に関わる墓誌が問題となり、水戸に関しては水戸学との関わりから水戸関係者の墓誌も問題であり、この点については次項のBで取りあげる。

○増上寺徳川将軍墓（東京都港区芝）

一九五八年から六〇年にかけておこなわれた改葬時に多くの墓誌が出土し、江戸の時代の墓制研究の画期となった発掘であり、鈴木・矢島・山辺『増上寺　徳川将軍墓とその遺品・遺体』（一九六七年　東京大学出版会）に詳しい。以下に十二の墓誌をあげる。

・徳川綱重（一六四四～七八）墓誌

石室蓋石（二〇〇×一〇四×二五）二枚の内側に生没年・官位などを刻す。

・第六代将軍徳川家宣（一六六三～一七一二）墓誌

銅棺の蓋裏（一五一×一五一）に生没年・官位などを刻す。大学頭林信篤の書丹。

・第七代将軍徳川家継（一七〇九～一六）墓誌

石室蓋石（二枚で二〇〇×二〇〇）の内側に生没年・官位などを刻す。大学頭林信篤の書丹。

・第九代将軍徳川家重（一七一一～六一）墓誌

石室蓋石二枚の内側に生没年・官位などを刻す。大学頭林信言の書丹。

・第十二代将軍徳川家慶（一七九三～一八五三）墓誌

石室蓋石七枚（各二七〇×四四×三三）の内の中央五枚内側に生没年・官位などを刻す。大学頭林健の書丹。

・第十四代将軍徳川家茂（一八四六～六六）墓誌

石室蓋石七枚（全体で二六六×二六六）の内の中央五枚の内側に生没年・官位などを刻す。大学頭林昇書丹。

・天親院任子（一八二三～一八四八）墓誌

石室蓋石七枚の内の中央三枚の内側に生没年・官位などを刻す。大学頭林健の書丹。

・清寛院宮親子内親王（一八四六～七七）墓誌

石室の上に同じ大きさ（六尺九寸×二尺一寸）の石が二枚重ねて置かれており、下の石の上側に生没年・官位などが刻されている。他の墓誌とは異なる形制である。

・天英院凞子（一六六八～一七四一）墓誌

石室蓋石四枚（各一八〇×三六×二四）に生没年・官位などを刻す。

・広大院寔子（一七七三～一八四四）墓誌

石室蓋石七枚（全体で三〇〇×二九一、五　幅の大きさは少しく異なる）の内の中央五枚に生没年・官位などを刻す。大学頭林皇

の書丹。

・玉樹院竹千代（一八一三～一四）墓誌

石室蓋石二枚（各一八一×九一×二七）の内側に生没年などを刻す。大学頭林衡の書丹。

・璿玉院嘉千代（一八一九～二〇）墓誌

石室蓋石の内側に生没年などを刻す。規模は玉樹院と同じ。大学頭林衡の書丹。

これら十二の墓誌のうち、十が石室蓋石で、ひとつが銅棺の蓋裏であり、ともに棺に向かって誌文が刻されている。ところが清寛院つまり皇女和宮のみは異なっており、ほゞ同時期に亡くなった敬仁親王（一八七七～七八）の石製墓誌（一八四×四九）と似ている。この形制は皇族の墓誌の形制に依っているのであろう。別稿参照。

○水戸徳川家

御三家のひとつである水戸徳川家の墓地は茨城県常陸太田市の瑞龍山にあり、徳川光國（一六二八～一七〇〇）が朱舜水（一六〇〇～八二）や東皐心越（一六三九～九五）を招いたこと、水戸学が朱子学を中心に国学や神道をふまえて発展した結果、瑞龍山の水戸徳川家の墓中には墓誌が副葬されている墓がある可能性がある。具体的には徳川光圀の墓誌が文献で知られる。

・徳川光圀墓誌

墓誌の文章は『事実文編』二五では「源義公墓誌」としており、水戸徳川家関係の碑誌文を集めた『瑞龍碑誌纂』（無窮会神習文庫蔵、彰考館本の写本）や『瑞龍碑誌纂鈔』（茨城県立歴史館蔵）では「故権中納言従三位水戸侯源義公墓誌」としている。水戸関係の葬制に関しては近藤啓吾『儒葬と神葬』（平成二年　国書刊行会）に詳しく、同書に附載された「源義公葬儀日録」には「次ニ御誌石ヲ下ス。地面ヨリ四五尺下ヘ入ベシ。（土ハ此前ヨリ段々可入）土ヲカクルコト手間取候ハヾ、誌石ハ梅野友衛門ヘ渡シヲキ四五尺下ヘ埋ベシ」と墓誌を副葬する状況を記し、墓誌の文章も記されている。尚、光圀自撰の「梅里先生墓誌（銘）」（『常山文集』巻二〇）がある。

『瑞龍碑誌纂』には水戸光圀の撰文に関わる碑誌をはじめ、多くの碑誌が録されているが、それらのなかには同一人物に墓碑と墓誌の両者がある場合が多い。たとえば光圀の子の綱條（一六五六～一七一八）には「故権中納言従三位水戸源粛公之墓誌」と「故権中納言従三位水戸源粛公之墓碑」の両者が録されており、両者は『事実文編』二八にも録されている。筆者は綱條の墓を確認しているわけではないが、墓誌が墓中にある可能性は高いといえよう。後述のように水戸には墓誌を副葬する伝統があるように思われるのである。

○紀伊徳川家

紀伊徳川家の菩提寺は和歌山県海草郡下津町上の長保寺である。初代・二代・三代・四代・六代の墓石には被葬者に関わる文字が全く刻されていないという異例な形制をしている。一方、江戸での菩提寺である東京都渋谷区千駄ヶ谷の仙寿院の墓域は改葬されているが、川越

逸行『掘り出された江戸時代』（増補改訂版　昭和五〇年　雄山閣出版）によると、改葬時に次の墓誌が出土したという。

・桂香院墓誌

桂香院（一七二六～一八〇〇）の名は久姫、第六代宗直の娘。墓誌は銅版で二六×四一×〇、六。写真および録文は前掲川越書に見える。

さて、架蔵〔図Ⅰ〕の拓本は江戸時代のものではないが、宗秩寮総裁であった徳川頼倫（一八七二～一九二五）の墓誌で、拓本によると大きさは七六×三六ほどであり、銅版に誌文が刻されたと推測される。頼倫は紀伊徳川家第十四第茂承の嗣子で、長保寺に埋葬された。銅版と思しいゆえ、これは墓中に副葬されたと推測されよう。このように見ると紀伊徳川家の墓には墓誌が副葬される例があったことがわかり、初代から四代そして六代の墓石に文字がないが、このような異例な形制をしている以上、あるいは墓中に墓誌が埋葬されているのではないかと推測されるのである。

○清水家

御三卿のひとつに清水家があり、東京都台東区上野の寛永寺凌雲院に墓があった。

・第五代斉彊次女鈎姫墓誌

鈎姫（一八四三～四四）の石製墓誌三枚の内二枚（八七×三一×一五、九〇×三〇×一七）が第七号墓から発掘されている。他の墓址でも石槨の蓋石裏には墓誌が刻されいた可能性が高い、といわれる。『上野忍ヶ岡遺跡国立西洋美術館地点』（一九九六年　国立西洋美術館埋蔵文化財発掘調査委員会）に詳しい報告がある。また古泉弘「大名家墓の構造」（『図説　江戸考古学研究事典』二〇〇一年　柏書房）参照。

B　水戸関係

先述のように、水戸には墓誌を副葬する伝統があったと推測されるのであるが、ここでは水戸の関係者の例をあげることにする。

・東皐心越墓誌

東皐心越の墓は彼が開山である水戸市八幡町の祇園寺にある。静嘉堂文庫蔵の『小宮山楓軒叢書』に『心越事実』があり、これには「大明浙省杭州府東皐心越大禅師墓誌」なる一文がある。心越の墓中に副葬されている可能性がある。

このように見ると、朱舜水の墓にも墓誌が副葬されたと推測されるのだが、筆者は確証を得てはいない。次に高橋広復の墓誌を紹介する。

・高橋広復墓誌銘

高橋広復（一七九六～一八三二）は彰考館総裁であった高橋広備の子である。架蔵〔図Ⅱ〕の拓本〈豪助高橋君墓誌銘〉によると水戸の「常磐之原」つまり現在の常磐共有墓地に葬られた。拓本からすると墓誌の大きさは三七×三五で、石か銅版かは判断しがたい。〔図Ⅱ〕からもわかるように撰文は会沢正志斎（一七八一～一八六三）である。会沢には『会沢正志斎文稿』（平成一四年　国書刊行会）があるが、この墓誌銘は録文されていない。このような

意味で史料的価値がある。

『会沢正志斎文稿』巻三は計五十七首の碑誌の文章からなり、この内、墓誌あるいは墓誌銘は二十五首である。これらの内、蒲生君平の「脩静菴蒲生先生墓誌」は後に取りあげるが、「亡児中次郎墓碑記」は会沢の夭折した子供の碑記で、「父安揮涕書」とあり、碑記とするのだから墓中に副葬した可能性が高い。丹太一郎（一七二四～九六）に関わって「丹太一郎壙記」と「一郎兵衛丹君墓表」の両者があり、前者は壙記としているので、これも墓中にある可能性がある。「石河婦人伴氏墓誌」には「以与余善、請銘其壙」とあり、これも墓中の可能性がある。このように会沢の文集中には墓中に副葬された可能性の高い墓誌の文章が散見される。それゆえ水戸には墓誌を副葬する伝統があると言わざるをえない。その掉尾を飾るものが、既に（註五）にあげた最後の水戸学者といわれる清水正健の墓誌である。この墓誌は儒葬の形式に従って地中深く埋められたのであった。

C　大名関係

大名は国許と江戸に菩提寺をもち、明治維新後、関東大震災や華族制度の廃止など、様々な要因により大名墓は改葬、縮小を余儀なくされ、その折に墓誌が見いだされたことがある。江戸の大名墓に関しては秋本茂陽『江戸大名墓総覧』（平成一四年　金融界社　以下『総覧』）が詳しい。以下、寺名をあげて見てゆくことにする。

・興禅寺（東京都港区白金）

米沢新田上杉家の三代勝定（一七六九～一八二一）、四代勝義（一七九二～一八五八）の墓の台石の上にそれぞれ石製の墓誌が置かれている。誌文は『総覧』に見え、それぞれ略歴が刻されている。大きさは前者が六七×三〇、五×一五、三で、後者が五五×二七、五×一二の長方形である。〔図Ⅲ〕参照。

・済海寺（東京都港区三田）

長岡藩主牧野家の墓地があったが、昭和五七年に長岡市栖吉町の普済寺に改葬された。この折、八つの墓から石室蓋石の墓誌が八、十二の墓から短冊形銅版の墓誌が見いだされた。『港区三田済海寺長岡藩主牧野家墓所発掘調査報告書』（一九八六年　東京都港区教育委員会）に詳しい。それぞれの長方形の蓋石は四・五枚からなり、それらの内の一枚の内側に誌文が刻されている。前掲将軍家の蓋石と同様である。誌文の内容はごく簡単で、ほとんどが「越後國長岡城主／牧野某槨」である。銅版墓誌の一番古いものは享保二〇年（一七三五）で、それぞれ三六前後×九前後×〇、四前後であり、第十七号墓の墓誌は三枚の銅版が組み合わさった形制である。被葬者の名前と生没年月日が刻されている。日本の古代の短冊形の墓誌を髣髴させるものである。〔図Ⅳ〕は第十七号墓の第十代牧野忠雅（一八五八没）の墓誌である。

・常林寺（東京都港区三田）

出羽新庄藩主戸沢家の墓の改葬の折に、十代戸沢正令（一八一三～四三）の墓から石の墓誌が発掘された。写真は河越『掘り出された江戸時代』に見える。長方形の小型のもので、名前と生没年

月日が刻されている。

・東禅寺（東京都港区高輪）

生坂池田家の墓地が平成四年に改葬された折に池田政弼（一七四四～七六）の石の墓誌が発掘された。一五〇×三〇×一〇の大きさで名前と生没年月日が刻されていたが廃棄されたといわれる。『総覧』に写真と誌文が見える。おそらく石室の蓋石であろう。

・梅窓院（東京都港区南青山）

美濃郡上藩青山家の墓地が昭和六〇年に改葬合祀された折に、六代幸完、七代幸孝、九代幸礼、十代幸哉、十二代幸宜男幸正の石製の墓誌が発掘された。七代と十代はそれぞれ二枚からなり、〔図V〕のように計七枚が墓地の入口に置かれている。写真と誌文は『総覧』に見える。それぞれ一五〇前後×三七前後であるが、厚さは二五前後のものと三七前後のものに分かれる。名前と血縁関係、生没年月日が詳しく刻されている。石の形状からして、これらは石室の蓋石であろう。

・妙高寺（東京都世田谷区北烏山）

台東区浅草の今戸にあったが、現在地に移転している。浜松藩水野越前守息女阿信姫の墓から改葬中に銅版の墓誌が出土したようで、中山狐村「日本墓制史之研究」下の四（『墓蹟』第八輯　昭和二年）に言及されている。

・善性寺（東京都荒川区東日暮里）

昭和三五年、石見濱田藩松平家の墓所が区画整理のために改葬合祀された折に石製の墓誌が発掘され、現在、「松平家諸霊之墓」という合祀記念碑の周りに並べられている。これらのなかには凸・凹状の二枚を対にして合わせる形式のものがある。八枚が墓誌で蓋三枚が後掲のような「憐れみて云々」と刻されたもので、墓誌には凸状のものが多く、後者は凹状であり、凸凹状の二枚が組み合わされ、楔状の金属で留められていたと推測される。このような形式は後掲の大久寺などにも見える。おそらくは現在並べられているものよりも多くの墓誌が出土したと推測される。岩坪充雄氏、坂詰秀一氏教示。坂詰「江戸の考古学事始め」（『八百八町の考古学』一九九四年　山川出版社、坂詰『歴史と宗教の考古学』に再録　二〇〇〇年　吉川弘文館）、『総覧』に言及あり。釈文は紹介されていず、発掘時の詳しい調査報告が求められるが、ここでは参考のために〔図VI〕と〔図VII〕つまり栄智院（一八〇八～五〇）の墓誌蓋と墓誌の釈文および計測値を示しておく。

墓誌蓋（七五×五七、三×一五）

栄智院夫人松平氏墓／此下に棺阿り／あ王れみてほる事／奈可れ

墓誌（七五×五八×一五、七）

夫人松平氏諱久濱田城主斎厚君之長／女也生母関口氏文化五年戊辰十月二／日生於旧封館林城中既而斎厚君年比／耆未有嗣子　恭廟以其先也世種族之／故　特恩降与一公子乃立為世子称上／総介斎良以女配之即夫人也後及世子／没夫人更称栄

智院嘉永三年庚戌／十月十二日病卒江戸邸中年四十三葬／大城北谷中善性寺

・大久寺（東京都北区田端）

伊勢亀山藩石川家九代総博の墓から出土した凸・凹二枚組の墓誌と墓誌蓋があり、凹状の蓋には「このしたにはかありあわれみてほることなかれ」（筆者未見、変体仮名で刻されている）とある。坂詰秀一氏教示。『総覧』、『北区の歴史散歩』（一九九三年　出版社名）に言及あり。『北区の歴史』（昭和五四年　名著出版社）に写真あり。

・広徳寺（東京都練馬区桜台）

広徳寺は「びっくり下谷の広徳寺」といわれた大名墓の多い寺で、昭和二年、下谷から現在地に移転した。福富以清『広徳寺誌』（昭和三一年　広徳会）によると、銅版の墓誌は棺の上に、石の合せ蓋の場合は唐戸の上に置いてあり、石の蓋には「〇〇夫人の墓なり、後人憐んであばく事なかれ」と刻してあるものがいくつかあったという。合わせ蓋とは善性寺の凸・凹状の対のものをさすのであろう。『総覧』によると、移転の際、石塔などが建設中の上野の松坂屋に払い下げられ、土台石に使用されたといわれる。岩坪充雄氏から、〔図Ⅷ〕のように野積みにされた石の中に墓誌があると教示された。『総覧』は柳川立花家の九代鑑賢（一七八九～一八三〇）の石製墓誌（九三×四七×一六）の釈文を示しており、これは〔図Ⅷ〕の右端のものである。〔図Ⅷ〕のなかには少なくとも四つの石製の墓誌が確認され、ひとつは〔図Ⅸ〕の高鍋秋月家の秋月種備（一七九三没）の凹状の墓誌で、おそらく「憐れんで云々」の凹状の蓋石があったと推測される。会津松平家の八代容敬の第六女宝鏡院殿（一八六一没）の墓誌も六四×六四×二一の正方形で凸状であるゆえ、これも「憐んで云々」の凹状の蓋があったはずである。このような次第であるので、これら野積みの石を整理調査すればより多くの墓誌を確認できるであろう。

・十輪寺（大阪府岸和田市野田町）

十輪寺の岸和田藩主岡部家第七代岡部長著（一七一一～五六）の墓が道路整備のため、昭和四五年に土生町の泉光寺に移転改葬の折、銅版墓誌二枚が発掘された。ほぼ正方形である。五輪塔の地と水の間から銅箱がでて、その上に置かれていた。『岡部長著と十輪寺』（『岸和田市史研究紀要』第一号　昭和四五年　岸和田市）に写真と釈文が見える。

以上、大名家関係を見てきた。石室の蓋石あり、銅版の短冊形あり、銅版あり、長方形の石のものあり、凸・凹状の対ものあり、様々である。墓誌に関わる大名家への規定があったのかは未詳であるが、大名家の格や被葬者の立場によって様々であったのであろう。

D　武家関係

武家という概念に問題があるが、ここでは大名家以外の武家に関わる例をあげる。

・宗清寺遺跡（東京都港区三田）

宗清寺は大正二年頃、中野区へ移転したが、昭和六一年、同寺の墓地にあたる部分から川越藩士島野尚格範実（一八四四没）と同夫人の墓誌が発掘された。前者は甕棺蓋石墓誌で、没年を記した簡単なものである。後者は草体で刻されている。『港区郷土資料館々報』第五号（昭和六一年）に釈文が見える。

・天徳寺寺域第三遺跡―浄品院跡―（東京都港区虎ノ門）

平成元年におこなわれた発掘調査で、144号墓から館林藩士岡尾氏の長子衛士（一八〇〇～二〇）の墓誌が、隣接した145号墓からは館林藩士岡尾庄六の娘末（一八二一没）の墓誌が出土した。ともに甕棺のなかの楕円形で木製の落とし蓋状のものである。高山優「東京都港区内の江戸時代墓跡遺跡」（〔江戸遺跡研究会第九回大会『江戸時代の墓と葬制』発表要旨　一九九六年　江戸遺跡研究会〕参照。〔図X〕はこの要旨集によるが、誌文は墨書されたものと推測される。

・東叡山寛永寺護国院墓地跡（東京都台東区上野公園）

一九八六年に行われた調査で、文献調査もふまえており、この点で注目される調査である。C区第61号墓からは山形藩の矢貝氏に関わる石製の墓誌が二点、「矢貝牛三郎高忠」とある墓誌（八九、二×二八×三、二）、矢貝牛三郎高悠娘（一八四二没）の墓誌（四二、二×二四、六×五、二）が出土した。同第63号墓からは藤原景濤末女（一八二八没五三歳）の墓誌（九一×二九×四、二）が出土した。ともに簡単な内容である。BII区第11―3号墓からは石製の「五代官医佐藤祐仙法眼天信之墓」（八七、四×二九、八×四、八）が出土している。これを墓誌とすることには一考を要するが、もともと墓中にあったもののようであり、墓誌と考えてよいであろう。『東叡山寛永寺護国院I』『同II』（一九九〇年　都立学校遺跡調査会）に詳しい報告があり、惟村忠志「東叡山寛永寺護国院墓地跡の調査と成果」（江戸遺跡研究会『墓と埋葬と江戸時代』二〇〇四年　吉川弘文館）等の関連論文がある。

・池之端七軒町遺跡（東京都台東区池之端）

平成六年から七年にかけての調査で都築家に関わる甕棺蓋石墓誌（都築家六代十左衛門妻　一八六二没）、石蓋墓誌（都築十左衛門成基　一八六五没）、木蓋墓誌（都築成基）と、喜連川家富田弥太右衛門に関わる銅札などが発掘された。小俣悟「池之端七軒町遺跡―近世寺院跡の調査―」（前掲『江戸時代の墓と葬制』）に詳しいが、計測値などは記されていない。都築家は与力で八丁堀に居住していたという。

・一行院（東京都新宿区南元町）

昭和三七年の改修工事の折、二枚の石製墓誌が出土し、現在は境内の仏舎利塔に保管されている。ひとつは紀州藩士湯川甚兵衛忠直（一八二七没）のもので、一一〇×四二、ひとつは紀州藩士湯川祐之（一八二九没）のもので、一〇〇×三〇。『新宿区の指定・登録文化財』（平成六年　新宿区教育委員会）参照。

・建部左衛門尉墓誌（岩手県一関市大町　建部正一氏蔵）

建部左衛門尉（一七四八没）の銅版墓誌あり。加藤諄氏教示。

・宝成寺（千葉県船橋市西船）

成瀬氏の石製凹状墓誌がある。インターネットによる検索。岩坪充雄氏教示。

・海禅寺服部家墓所（愛媛県今治市山方町）

平成九年、海禅寺の今治藩筆頭家老服部家の墓所修復にともない花崗岩の墓誌が発掘された。平成十三年現在、今治市通町の吹上城博物館に保存展示されている。土井光一郎「服部家墓所出土品について」（修復時の記念冊子　今治藩筆頭家老服部家墓所を守る会『服部家を偲ぶ』　平成九年）によると、二十基の墓から十六個の墓誌が出土したと記すが、簡単な記述であり、詳しい報告が求められる。そこで、これらのうちの二つを紹介しておく。〔図Ⅺ〕は展示墓誌全体である。後列に六組、中列に六組、前列に五組あるが、前列左奥のものは甕棺の影でありよくは見えない。対のものが多く、前列の右から3・4・5番目は各々一枚であり、3と5は一対と推測される。とすれば土井の記す十六個というのは十五対とひとつの意味であろう。前列の2・4、中列の10・11は陰刻であるが、他は墨書である。〔図Ⅻ〕は中列右端の6で、

服部逸軒正令□／仕于当国　今治侯／後の人あハれミて／保る古となか連

とある。正令（一七六六没）は服部家の二代目であり、対の石の片方にはなにも記されていないので、被葬者の名と「憐れみて云々」の定型句が記されていることになる。4は陰刻であり、

此下は服部外記正恕□／墓那り後能人あハれ／みて埋めた万へ

とあり、正恕（一八四四没）は五代目である。6の大きさはほぼ三六×二三×九、4の大きは三五×二五×九（右下を欠損）であり、他もほぼ同様の大きさで、誌文も読めない部分が多いが同様の内容であり、石はかなり荒削りな作りである。本質的には前掲善性寺の凸・凹で一対の墓誌と同じであるが、〔図Ⅺ〕でわかるように凹状の部分に誌文がある場合が多く、誌文も極めて簡略である。土井によると、文字があるのは上の石であるというのだから、凸状を下にして誌文のある凹状をかぶせて甕棺あるいは石室の上に安置したのであろう。高屋枚人墓誌や紀吉継墓誌のような日本古代の墓誌を髣髴させ、このような素朴な墓誌は他にはないようで注目すべきである。

・龍雲寺（佐賀県佐賀市八戸）

多久安輝の墓誌があり、凹状の石に刻されている。四七×三五×一六。おそらく凸状のものもあると推測される。インターネットによる。

以上、武家関係を見た。様々な墓誌があるが、これらの例からは大名墓に見られる石室の蓋石に刻されたものはなく、大名に比べると簡素であることがわかる。

E　儒家・医家・文人関係

これらの墓誌は当然のことながらいわば中国的なものであるが、滝沢覚伝夫妻墓誌は日本の古代の墓誌の伝統をふまえているといえる。

・国史跡林家墓地（東京都新宿区市ヶ谷山吹町）

林羅山以下、江戸幕府の文教政策を担当した林家一族の墓地である林家墓地は昭和五一・二年に調査され、『国　史跡林家墓地調査報告書』（昭和五三年　東京都新宿区教育委員会）としてまとめられている。この際、墳墓の土留めなどから墓誌のみのもの三、墓誌蓋のみのもの二、墓誌と墓誌蓋の対のもの九が発掘された。墓石・墓誌・墓誌蓋のある例を四者あげると、五世林鳳谷（一七二一～七四）には墓石の周囲に刻された墓碑と凸状墓誌（三四、八×五二、四×一一）・凹状墓誌蓋（三五、四×五二、四×一三、一）があり、鳳谷の継配貞恭孺人（一七二〇～九一）には凸状墓誌（三六×四五、六×一一、六）・凹状墓誌蓋（三〇、六×四五、五×一〇、八）があり、鳳谷の子の龍潭（一七四四～七一）には凸状墓誌（三二、二×四八、五×七、五）・凹状墓誌蓋（三二、七×四八、九×五、五）がある。一方、龍潭の配である安操孺人（一七四七～一八〇二）の墓誌（三〇、五×七六×八、四）と墓誌蓋（三〇、五×七六×八、八）は平面で凸・凹状ではない。このような事例からすれば、この墓地には多くの墓誌と墓誌蓋が埋もれていると推測されよう。尚、報告書を見る限りでは「憐れみて云々」の誌文のある墓誌蓋はなく、墓誌蓋には被葬者の官職と名前が刻されている。委細は報告書を参照されたい。

・青葉養浩墓誌（東京都新宿区若宮町）

平成十三年に発掘された牛込城趾第154号遺構から、青葉養浩（一七四五～九五）の凸・凹状一対の石製墓誌が出土した。新宿歴史博物館保管。青葉は讃岐高松藩藩儒、講道館総裁。凹状墓誌蓋（重さ約十三kg）と凸状墓誌（約三〇×約四五×約七、重さ約十四kg）。甕棺の上にあったと推測される。『新発見遺跡速報展　２００２新宿の遺跡』（平成十四年　新宿歴史博物館）参照。

・藤森天山墓誌（東京都港区南麻布　曹渓寺）

天山（一七九九～一八六二）は『海防備論』などで知られ、安政の大獄に連座した。昭和十一年、曹渓寺の現在地の墓所へ移転の折、凸・凹状一対の石と銅版の壙誌が出土した。北川博邦氏教示。望月茂『藤森天山』（昭和一一年　藤森天山先生顕彰会）によると、甕棺の上に一対の石があり、甕棺のなかに壙誌が入っていた模様。拓本と写真が伝わっており、凸状には、

是ハ藤森天山／の墓奈り／阿王れみて又／うつ三たまへ

とあり、凹状には文字はなく、凸状の文字のある部分の拓本の大きさは約二三×約二一、壙誌の大きさは約四〇×約二三。壙誌の誌文は前掲書に見える。

・滝沢覚伝夫妻墓誌（東京都文京区小日向　深光寺）

滝沢馬琴（一七六七～一八四八）は文政六年（一八二三）、深光寺の滝沢家墓所に、上に地蔵尊を載せた「滝沢氏祖先之墓」と刻し

た墓を建て、銅牌をいれた小瓶を墓中に埋めた。馬琴の『吾仏乃記』には「故の穸を埋ること凡そ一尺ばかり、深さ三尺ばかりにして、中央に見了院殿・一蓮院殿の墓表の銅牌を納たる小瓶を埋めしむ。其銅牌一枚、竪七寸、横二寸五分厚壱分、重百三十四銭目。其碑文、表三行、裏五行、共に百二十六字、左の如し」とあり、誌文を記録している。これは短冊状のもので、おそらくは古代日本の墓誌に倣った墓誌と称してよいであろう。彼の学識を示している。柴田光彦「滝沢家墳墓考―馬琴自筆『滝沢氏墓誌』から現在墓を見る―」（『跡見学園女子大学紀要』第三四号　二〇〇一年）参照。

・鵜飼石斎墓誌（京都市左京区一乗寺小谷町　円光寺）

石斎（一六一五～六四）は江戸に生まれ、攝津尼崎藩に仕え、京都で講説した。平成十三年に改葬した折に凸・凹状一対の石製墓誌が出土したようである。墓所の石斎の墓石の周りには陳元贇（一五九五～一六七一）の寛文四年（一六六四）の「貞節先生藤原鵜飼信之墓誌銘」が刻されており、墓石の脇に【図Ⅻ】のように墓誌二枚が並べて建てられている。凹状（三九×五三×九）のものには寛文四年の長沢堅節の墓誌誌文が刻され、凹状の蓋（三九×五三×九）には中央に「鵜飼石斎府君墓誌」とあり、右に「延宝五年丁巳十一月／十二日改葬円光寺」とあり、左に「後乃世に山くつ連墓やふれ／この石あら八れな者あ王れ／みてお本ひ多まへ」と「憐れみて云々」の定型句が刻されている。石斎の墓はもとは新黒谷にあったことが墓誌銘や墓誌誌文にみえるが、延宝五年（一六七七）に円光寺に改装されたことがわかる。「憐れみて云々」の定型句がもともと刻されたいたのか、改葬時に刻されたのかは不明。大島晃「〈先学の風景―人と墓〉鵜飼石斎」「同補遺」（『漢文学　解釈与研究』第四・五輯　平成一四・一五年）参照。

・稲生氏関係墓誌（京都市左京区浄土寺真如　迎称寺）

医家・本草家として著明な稲生若水（一六五五～一七一五）とその父恒軒（一六一〇～八〇）、母河瀬氏（一六一九～九五）そして若水の長男元二（一七〇四～〇五）の墓誌四枚が平成四年、迎称寺の稲生家墓所を改葬の際に発掘された。町泉寿郎氏・岩坪充雄氏教示。写真は真柳・杉立「目で見る漢方史料館（五三）　江戸本草学の大家稲生若水の墓誌」（『漢方の臨床』三九巻七号　平成四年）やインターネットで見える。恒軒と河瀬氏の墓誌銘は共に伊藤東涯（一六七〇～一七三六）の『紹述先生文集』巻十四に「恒軒先生稲生君墓誌銘」「稲生君嬪河瀬氏墓誌銘」として見える。恒軒の誌文によると、恒軒の墓は元禄九年（一六九六）三月十日に迎称寺へ改装されており、河瀬氏の誌文によると、元禄八年一月に亡くなり迎称寺に葬り翌年六月に墓誌を依頼されたという。とすると、河瀬氏が迎称寺に埋葬された後、恒軒も同寺へ改装され、前者には「鑱鍮勒詞貯以石函、蔵諸幽窀」と、後者には「鑱鍮勒詞、蔵諸壙中」とあり、墓中に埋めたことを記す。事実、ふたつの墓誌は一緒に石函に納められ、石函は針金状の金属で結わえら

れていたようである。同時期に撰文されて墓誌が作られたことになる。墓誌の金属について真柳・杉立は青銅とする。大きさはそれぞれ二五×五〇である。若水の墓誌には「稲若水先生墓誌」とあり、松岡玄達（一七四六没）の撰文、青銅で両面に誌文が刻されている。元二は夭折し、若水は誌文を「泣誌」と記している。真鍮である。若水、元二の墓誌もそれぞれ石函に納められており、針金状の金属で結わえられていたようである。

・河波自安墓誌（佐賀県多久市郷土資料館寄託）

自安（一三六五～一七一九）は多久藩の東原精舎初代教授。長方形の石製で、凸状・凹状で一対であり、後者の中央に「先家君自安先生墓誌」と刻され、前者に誌文が刻されている。『多久市史』第二巻（二〇〇二年　多久市）に写真が見える。

以上、儒家・医家・文人関係を見てきた。武家に比べれば簡素な墓であり、一枚の石製か、凸・凹状の対のものか金属製のものであるが、誌文の内容はかなり詳しく、いわば中国の伝統的なそれに近いといえよう。官職や生没年のみのものとは異なるのである。また滝沢覚伝夫妻の短冊状のものは注目すべきである。

F　文集にみえるもの

儒学者の文集などには墓誌や墓誌銘といった文章が散見される。それらが何等かの形で石や金属に刻されたのか、あるいは単に文章として書かれただけなのかは判断し難い場合がある。実際に刻された場合でも、先述のように墓中に埋められたわけではなく、むしろ墓石の周りなどに刻された場合が多いと思われる。たとえば東京都文京区大塚の大塚先儒墓所に墓のある古賀精里（一七五〇～一八一七）には『事実文編』四十九に神戸侯本多忠升撰の「古賀精里先生墓誌銘」があり、「遺命葬儀一遵儒葬、不用浮屠法」とあって、儒葬であるのだから墓誌があってもよさそうなものであるが、この墓誌銘は墓石の三面に刻されている。しかし中には、誌文中で墓中にある旨を記したものもあり、既に会沢正志斎の例をあげたし、稲生恒軒、妻河瀬氏の場合も誌文中に記され、墓中にあった。そこで、ここでは誌文中でそのように記している例と、同一人物に墓表のような碑文と墓誌があり、墓誌は其の人物の墓所には見えず、墓中にある可能性がある例をあげることにする。

まず誌文中に、墓中にある旨を記した例である。

・立所先生小河君墓誌

これは前掲『紹述先生文集』巻十四に見え「鑱諸鍮版、以埋墓隧」とあるのだから、稲生家と同様に墓中にあるはずである。立所（一六四九～九六）は京都の儒者で、誌文によると郊西の上品蓮台寺大慈院に葬られたという。かなり長い文章なので、鍮版の両面に刻されたのであろう。

墓誌の存在が推測されても、それを確認するわけにはゆかないゆえ、ここに墓誌研究の限界があることになる。既に林家墓地にはかなりの墓誌が埋葬されていると推測されることを記した。とすれば大塚先儒墓所の墓にも同様の例があってもおかしくはない。そこで一例をあげ

る。

・二洲尾藤先生誌

二洲（一七四五～一八一三）は寛政の三博士の一人。先儒墓所の墓には墓石の裏面に池孝暢撰の墓碑銘が刻されている。一方、『事実文編』四十八には逸名氏の「二洲尾藤先生誌」があり、「誌其在時所自為也。今不敢換一字、謹刻石寘諸幽室。従其治命也」とあるのだから、実質的に自撰の石の墓誌を生前の命令に従って墓中に入れたはずなのである。

既にB水戸関係のところで会沢正志斎撰の蒲生君平の墓誌にふれた。この場合も墓中にあると推測してもおかしくはない例である。

・蒲生君平墓誌（東京都台東区谷中　臨江寺）

君平（一七六八～一八一三）は尊王論者として知られる。墓石の正面上部に「蒲生君蔵墓表」と篆額があり、四面に藤田幽谷（一七七四～一八二六）撰の墓表が刻されている。先述のように君平の墓誌である「脩静菴蒲生先生墓誌」があり、正志斎が撰文した墓誌のいくつかは墓中にあるので、墓表が墓石に刻されている以上、墓誌が墓中にあってもよさそうである。誌文には「先生之病革、自撰脩静菴大人碑銘謂。敬吾君以礼、撫吾民以徳、禦戎夷以義。精霊在天地、俟其人以授斯三宝。友人以其文成倉卒、而語或渉忌諱、故議埋之墓中。使予記其事」と微妙なことを記している。君平は「静脩菴大人碑銘」を自撰しており、その中で「三宝之説」を説いているが、これは当局の忌諱に渉るのでこの「碑銘」を墓中に埋め、正志斎にこの事実を書かせた、というのである。「三宝之説」については墓表でも「吾聞其臨終、尚称天地之正気、且有三宝之説云、留精霊於天地之間、将俟其人而授之。古之所謂、死而不亡者其君蔵之謂耶」と記しているが、礼・徳・義の三宝には言及してはいない。はたして君平の墓には「碑銘」と墓誌は埋葬されているのであろうか。

G　その他

墓誌をどう定義するかはなかなか難しいことを既に記したが、ここでは墓誌と称してよいか判断に躊躇する例をあげることにする。

・木百年妻深井氏墓（長野県飯山市蓮　木鋪家墓地）

木百年つまり木鋪百年（一七六八～一八二一）は柏木如亭（一七六三～一八一九）門人の漢詩人で、江戸の文人たちとの交際が深かった。その妻深井氏（一七六四～一八〇九）は、百年が江戸に出ている折に亡くなり、ために百年は大窪詩仏（一七六七～一八三七）篆額、柏木如亭撰文、巻菱湖（一七七七～一八四三）書丹、中慶雲刻の御影石の碑刻を作り、江戸から馬で運んだといわれる。当時の錚々たる文人が関係していることになる。このような意味でも貴重なものであるが、実はこれは墓石の中に塡め込まれており、石の観音扉の中にある。扉には右に「木百年妻」左に「深井氏墓」と刻されており、篆額は碑刻上部に「木百年妻深井氏墓」とある。非常に珍しい形制をしており、墓に関わる碑文ゆえ、これを墓碑とするか、墓石中にあるゆえ石室中にあるとして

墓誌とするか、判断に苦しむのである。珍にして奇なる例として紹介しておく。岩坪充雄氏教示。岩坪氏の個人誌『東隅随筆』一八八・一八九号（平成一八年）に紹介と拓本写真がある。田川幸生「漢詩人・晩晴吟社の木百年について」（『高井』一三九号　平成十四年）参照。

三

以上、江戸時代の墓誌について散漫な記述をしてきた。小稿では墓中に副葬された墓誌または墓誌的なもの、あるいは墓誌的な文章が刻されたり、書かれたりしたものすべてを墓誌として取りあげてみた。対象とした数は少ないとはいえ、そこには様々な類型（石室蓋石、銅版、石製、短冊形銅版、凸・凹状の石製対のもの、甕棺蓋石、甕棺木製蓋）があることがわかり、おそらくは江戸時代における墓誌の在り方の類型の大半を示したと思われる。筆者はもともと中国史畑の者であるゆえ、中国の所謂墓誌からすると、石室蓋石などの誌文を墓誌とするかについては躊躇せざるを得ず、いわゆる中国的な墓誌に目が向いてしまうが、墓誌の日本的受容、あるいは大乗段にかまえて文化変容という点からすれば、様々な類型の墓誌が生まれるのは当然のことであろう。また漢字文化圏の墓誌全体と関連づけて扱わなければならないと思う次第である。

一方、儒学者の文集などに墓誌あるいは墓誌銘が散見されるが、それらの中で実際に副葬されたものがどれだけあったかはわからないし、墓中にあるにしてもそれらを確認するすべはなく、この点で墓誌研究は隘路に入ってしまうのである。また実際に墓誌が出てきても、公にはされなかったこともあると仄聞している。とはいえ、墓地の改葬や考古学的な発掘によって既知例は今後増加することであろう。既知例が増加するにつれて墓誌に関わる議論がなされることになるに違いあるまい。このような状況にあって、小稿をふまえて以下いくつかのことを指摘して結論としたい。

（1）以上の記述と関連するが、墓誌の定義をどうするか。様々な角度からの議論が要請されよう。

（2）大名家と一般武家などでは墓制が異なる印象をうける。これに関わる法的規制があったのか否か議論されるべきであろう。また古代にあっては墓碑は喪葬令によって規定されていたが、[註六] このような規定は観念のうえではどのように継承されたのであろうか。

（3）日本古代の墓誌は別として、中世の墓誌は前掲大脇が指摘するようにほとんどが骨臓器に刻されたものであるが、江戸時代になると石や金属版に被葬者の略歴などを刻したいわば中国的なそれが増えてくる。中国的な墓誌の受容という観点から既知例の増加をまって分析する必要があろう。憶測を記せば、やはり水戸や江戸、京都を中心に儒学者間での墓誌への関心が中国風の墓誌の増加をうながしたのであろうし、文禄・慶長の役での朝鮮半島経由の中国文化の受容、隠元（一五九二～一六七三）や朱舜水、東皐心越らの来日との関わりも問題となる。この点は日本における亀趺碑の在り方とも

関係するであろうし、[註七]墓に関わる様々な石碑に関係するであろう。

（4）一方で、江戸時代後半の金石学への関心の高まりから日本古代の墓誌へ目が向けられたことも注意しなければならない。いわば日本的伝統への復帰である。牧野家の銅版墓誌の内、一番古いものは享保二〇年（一七三五）であり、この時期、小野毛人墓誌（一六一三年出土）の存在がどれほど知られていたかは未詳であるが、滝沢馬琴が作った墓誌は文政六年（一八二三）であるから、既に発掘されていた船王後墓誌（一七九四年以前出土）や石川年足墓誌（一八二〇年出土）のような短冊形の金属製墓誌の存在は知っていたと考えてよいであろう。

（5）「憐れみて云々」の定型句のある墓誌は多く、これに関わる固定した名称はないようであり、説明に不便である。きわめて日本人的な心情を表す文章であり、よい名称はないものだろうか。同様に凸・凹状の対の墓誌の名称も必要であろう。石室蓋石墓誌の蓋石を枕木状などと記す報告もあるが、これも統一した名称が必要であろう。これらにはおそらくは伝統的な名称があったはずだが、今日では伝わっていないのかもしれない。ともあれ名称の固定、統一が望まれるのである。

註

（一）近年の論考としては福原啓郎「西晋の墓誌の意義」（『中国中世の文物』一九九三年　京都大学人文科学研究所）に学説史の詳しい整理が見られる。

（二）儒学者の文集には墓誌あるいは墓誌銘が散見されるが、実際には刻されなかった場合もあり、刻された場合でも、これらの多くは墓中にあるわけではなく、墓石の周りに刻される例が多い。この場合、文章としては墓誌あるいは墓誌銘であるが、形制のうえでは墓誌とはいえないことになってしまう。後述の伊藤東涯『紹述先生文集』に見られる墓誌のなかには、墓中に収める旨の記述があるものがあり、この墓誌が改葬の折に見いだされたのであった。

（三）これらの中で？をつけたように、新井白石の墓地を円照寺とするが、白石の最初の墓は浅草の報恩寺であり、後に中野区上高田の高徳寺に移されている。また佐伯昌明の墓地を東京都の本然寺とするが、これは京都市上京区の本然寺である。

（四）沖縄の墓誌については平敷令治「沖縄の墓誌」（沖縄県地域史協議会編『南島の墓』一九八九年　沖縄出版）に詳しい。

（五）その後知り得た明治以降の墓誌の例をいくつかあげておく。

・町田久成墓誌。町田（一八三七～九七）は初代東京帝室博物館館長。時枝務氏教示。柴田光彦編『黒川文庫目録』（平成一三年　青裳堂書店）参照。墓は東京都台東区上野桜木の津梁院と滋賀県大津市円城寺町の法明院にある。

・勝海舟墓誌。勝（一八二三～九九）は政治家、枢密顧問官宮島詠士書丹。青石。墓は東京都大田区洗足池畔。

・正岡子規墓誌。正岡（一八六七～一九〇二）は俳人。銅版。大龍寺（東京都北区田端）に葬られたが、墓誌は盗まれたという。『北区の歴史』（昭和五四年　名著出版）参照。

・黒川真頼墓誌。黒川（一八二九～一九〇六）は帝国大学教授。銅版。前掲『黒川文庫目録』参照。墓は東京都台東区谷中の谷中霊園。

・三島中洲墓誌。三島（一八三〇～一九一九）は二松学舎創立者、東京帝国大学教授。二枚の鉄版。他に、中州の末娘である藤子の銅版墓誌一枚、中

州の妻妹尾氏の銅版墓誌一枚がある。『三島中洲の学芸とその生活』（平成一一年　雄山閣出版）参照。墓は静岡県御殿場市の富士霊園に移転した。

・依仁親王墓誌銘。依仁親王（一八六七～一九二二）は東伏見宮初代。杉山三郊書丹。『三郊墨翰』に見える。伊藤隆夫氏教示。墓は東京都豊島区豊島ヶ岡皇族墓地。

・徳川頼倫墓誌。徳川（一八七二～一九二五）は徳川慶頼第六子。銅版。墓は和歌山県海草郡の長保寺。〔図Ⅰ〕参照。

・加藤高明墓誌。加藤（一八六〇～一九二六）は首相。吉田苞竹書丹、銅版。『碑帖大観』大正十五年六月号、同七月号に見える。柳澤智子氏教示。墓は東京都港区南青山の青山霊園。

・下村観山墓誌。下村（一八七三～一九三〇）は画家。加藤諄氏教示。墓は東京都台東区谷中の安立寺。

・関口操墓誌。関口隆正の妻。大正六年（一九三一）没。関口隆正『夢界遺文』巻二の「関口孺人墓誌」に「葬于静岡臨済寺考妣墓側。隆正乃撰墓誌、令厝諸石函上」とある。

・清水正健墓誌。清水（一八五六～一九三四）は最後の水戸学者といわれる。拙稿「清水正健にかかわる二・三の新資料と著作一覧」（無窮会『東洋文化』復刊九一号　平成一五年）参照。墓は茨城県水戸市谷田町の宝蔵寺。

・宮島詠士墓誌。宮島（一八六七～一九四三）は書家、善隣書院院長。松平康国撰・宮島貞亮書丹の〈故善隣書院長宮島君墓誌〉拓本が宮島家に伝わる。杉村邦彦・寺尾敏江編「資料紹介　宮島詠士清国留学書簡（1）」（『京都教育大学紀要A』人文・社会九一号　一九九七年）に見える。墓は東京都港区南青山の青山霊園。

・貞明皇后墓誌（陵誌）。高松宮書丹。

・香淳皇后墓誌（陵誌）。常陸宮書丹。

（六）大橋一章「古代墓誌の研究」（『史学雑誌』第八三編第八号　昭和四九年）参照。

（七）平勢隆郎『亀の碑と正統』（二〇〇四年　白帝社）、拙稿「津和野神社の亀井茲矩の亀趺碑　撫霊社之碑　をめぐって」（『群馬大学教育学部紀要　人文・社会科学編』第五五号　二〇〇六年）参照。

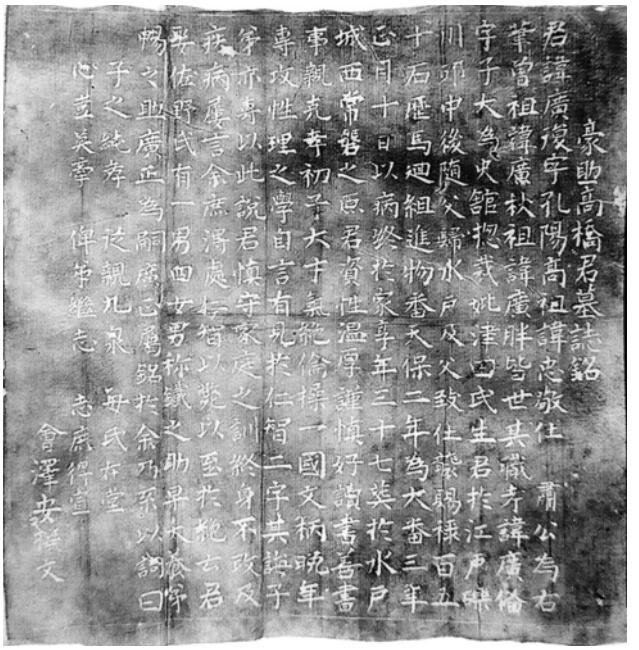
〔付記〕

小稿は平成十六・十七・十八年度の科学研究費基盤研究（C）による研究成果の一部である。教示を賜った各位に感謝したい。

（丙戌九月六日稿）

〔補記〕

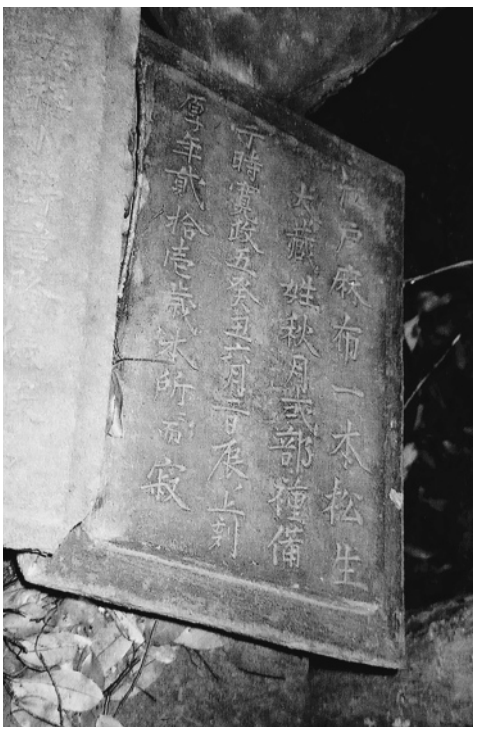
小稿投稿後、中国の墓誌の研究史に関して板井昭彦「中国墓誌源流考」（『書叢』二〇号）が発表され、また八尾隆生「碑文に見るヴェトナム黎朝初期の政権抗争」（『アジア遊学』九一号）に「箱碑文」という形態の墓誌が報告された。



〔図II〕　高橋広復墓誌銘拓本

〔図Ⅰ〕　徳川頼倫墓誌拓本

〔図III〕　興然寺の墓誌



〔図Ⅸ〕　秋月種備墓誌

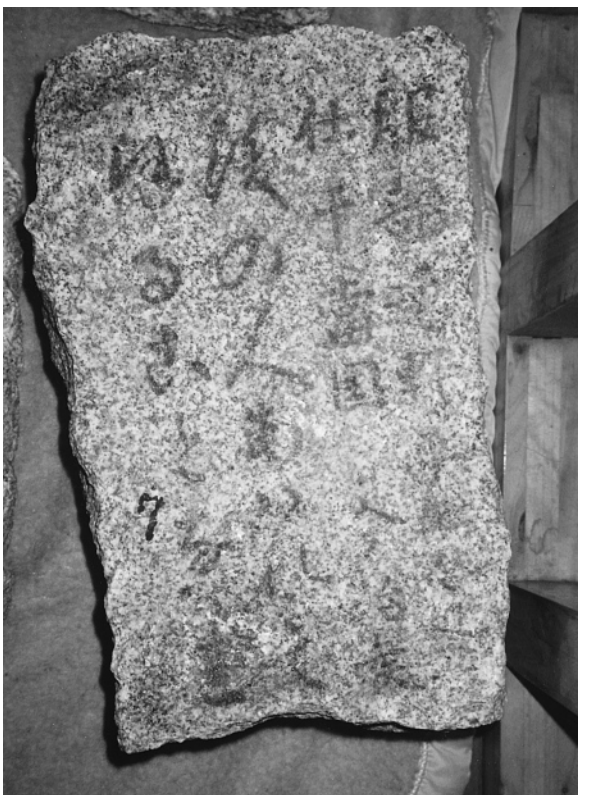
〔図Ⅳ〕　牧野家銅版墓誌

〔図Ⅴ〕　梅窓院の墓誌

〔図Ⅶ〕　栄智院墓誌

〔図Ⅵ〕　栄智院墓誌蓋

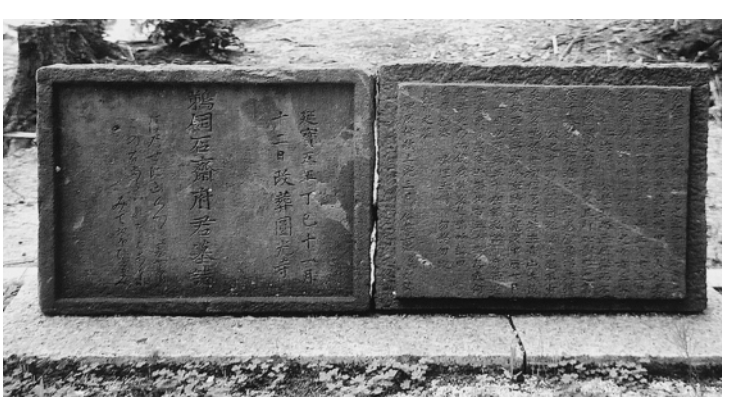
〔図Ⅷ〕　広徳寺の野積みの石



〔図Ⅻ〕 服部正令墓誌

〔図Ⅹ〕 岡尾衛士墓誌

〔図Ⅺ〕 服部家墓誌



〔図Ⅲ〕 鵜飼石斎墓誌